方向　第三五号　一九八四年十二月十日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（一八）

赤谷明海

〈昭和二〇年十二月二十二日の項のつづき〉

○昨日は少し寒かつた。然し一昨日は小春日和と云ふよりはもつと強く陽の射す温い日であつた。その温い日の午頃大便に行つたが、済んだあとどうも肛門が普通でないへなかつた〉。夕方になると痛み出して来た。歩くとその一部分がすれる様である。以前から脱肛の気はあつたので、用便後の緊め方が悪かつたのだらうと、夜に入つて再び排便し完全に緊縮さして戻つたところ、すぐに肛門の一内部壁が顔を出して、いくら押してもすぐに戻つて来る。そしてそこが痛む。ぢつとしてゐれば何ともないが動くと痛い。せきをしてもひびいて痛い。一夜越して昨朝になると、今まで一部の壁が現れてゐたのにへだけなのに〉、今はその部分が蚕豆大と大豆大との二個のかたまりと変つてゐる（或は内から出て来たのかもしれない）。用便後紙を使ふと相当血がついてゐる。そして痛みは一層強くひびく。それでも食事の世話等に立働いてゐたが、今日となつては堪へられず塗布薬を貰つてぢつと寝てゐる。何故急にこんな事になつたのか判らない。多分こんなのをイボ痔と云ふんだらうが、今まで、排便の際よく出血したり脱肛したりしたので、自分には痔の病がある事を知つてはゐたが、これ程痛くて歩行に

も差支へる様なものが痔であるとは知らなかつた。結核患者に多い痔の患者、渠谷へはりたにゝ氏へ兄弟弟子。結格で死亡ゝの例、痔ろうへ原漢字ゝ、こんな事を思つてゐると、昨夜は夢で、遂にあはれな痔ろう患者となり、内地の土を踏むことを断念してゐる自分になつてしまつてゐた。（一二、一二）

○紫陽花姫へあじさいひめゝ」と題する深田久弥の小説を読んだが、一向に感心させられる点もなかつた。勿論彼氏の常に取材する子供の世界を描いたものだが、子供に読ますものとしては理窟が多く、浪漫性が少く、大人に読ますものとしては合理性に欠け、無稽な点が多い。ただ後の方に編み込まれてゐる「真吉」といふ小編ハママゝが明るいへくゝ力強い印象を与へる佳作であると思ふ。（一二、二三）

○同室の者六名。H曹長が担送、S伍長にK、Oの両名と自分が担送の通報、そのほかM一等兵が護送である。Kと Oは自分の左右にゐて、どちらも昨年九月の現役。Kは九州の漁師の息子、Oは大阪の鍛冶屋のせがれ。Kの方はまだ田舎人らしい素朴さがいくらか残つてゐるが、Oに到へママゝつては大阪人に通有の嫌味を十分に具へてをり、極めて感じが悪い。さて食事となると、曹長班長以外の四名のうち、誰かが起きて世話しなければならないが、朝は寒くてなかなか起きが悪い。Mは後から入つて来た気兼ねと護送と云ふ名目とで、外の者が起きないと仕方なく起きて来る役割になる。OやKは起きても、飯上げや飯分配はしても、洗濯や湯タンポの入れ替へ、掃除などはしようともしない。曹長は食意地がきたなくて大食漢ときてゐるので、何かとその方面にやかましく、班長はきき難い東北弁であれこれと身の廻りの用事を云ひつける。今のところ、四人が彼等の使役要員の様で、就中、Mが曹長の、自分が班長の、夫々当番の様になつてゐる。患者同志お互に面倒を見合ひ、元気な者が弱い

者の世話をするのは当然であり美しい事であるが、今の場合の様に、階級の上の者が下の者に世話さすのが当り前の様に考へ、世話を受けながら何等感謝の言葉を吐かないのみか、ぶつぶつと不平ばかり云つて叱りつける現状では、世話する側に於いても不平が出る。だから自分の如きも、腹が立つときは起きない。たとへ気分がよい時でも寝てしまつて動かない。そこは担送患者の都合のよいところである。（一二、二六）

○人の寿命は判らないとよく云はれる。特に病院生活では、独歩患者の元気な者が急に悪くなつて死んで行くとその感を深くする。然も斯様な場合が馬鹿に多い。自分のもとゐた二十七号室の如き、聞いて唖然とする程たちまちのうちに意外な事が起きてゐる。後送があつてからの天気のいい日、二十七号の前を通りかかつて、そこに後送予定の今井がゐるので不審を質すと、熱発で除へよゝけられたと云ふ。話をきけば、他に日比野兵長を初め、辻義人等十数名も急に悪くなつて除外され、かへつて担送の小川上等兵等が帰つて行つたと云ふ。その時聞いた中、辻浅記が死んだと云ふのは不思議ではないが、小高が死んだと云ふのは意外だつた。さてその様に話す今井が、少し熱はあるが他に動く者がゐないので飯上げにも行つてゐるとかだつたが、その後一週間程して他の者に会つたところ、この今井が前夜死んだと云ふ。辻義人は血便を出して頻死、飯分配で自分勝手な事をしてゐた古俣上等兵は脳症を起し、増田も精神に異常を来し、今井の隣にゐた森も危険、永田は天然痘で伝病へ行つたとか。これでは無茶苦茶である。二十七号から後送になる者の中、自分がへ家へのゝ伝言を頼んだ者が二人ある。それがこの今井と辻。一人は既に亡く、他は頻死だと云ふ。僅か週日旬日の間にかうも変らうとは予期しなかつた。彼等よりはるかに衰弱し、通報さへ打たれてゐる自分が、かうして永らへてゐるのが不思議だ。（一二、二七）

○十一月二十九日　体重測定　三八、二〇〇（〈十〉〇、一〇〇）

食欲旺盛、便通もよく、発熱はなし、以前と違つて適宜運動もしてゐるのに、相変らず体重は増えない。（一二、一九）　現在、痔の方は時々痛むが、一日二回の坐薬の塗布で大体良くなつて来てゐる。咳や痰は朝の起ぬけに少々あるだけ、但し寝汗は依然として止まない。〈ここで年が変り、昭和二十一年。〉

昭　和　二　十　一　年

○迎春の用意とて〈は〉、三ケ月余に亘るボウボウたる頭髪を刈つて貰つただけの事。明けて新春になつたところで、二片の餅を食つたと云ふだけで、他に何の変つたこともない。相変らず寝てばかり。新春の所懐など、七面倒くさいものは更になく、ただただ現在のもろい身体を可愛がつて、再び内地の土を踏む日のある事を願ふばかり。

三十一才。実に我ながら驚くべき年数ではある。だがこんな事はどうでもいい。この三十一と云ふ年をとつて既に今日は五日。案外日の経つのが早い。夜は長くてたまらないが、昼は何もしない割に早く暮れてゆく。起床点呼の声をきいてしばらくすると「飯上げ」の声がする。そろそろ起き出して湯タンポの取かへでもしてゐると、二十八号まで朝飯が運ばれ、すぐ分配、朝食となり、食後パタパタと食器を洗つて、蒲団にもぐり込むともう動かない。身体が温つてウツラウツラしてゐる日は尚の事、目覚めてゐても、とりとめもない事を考へてゐるうちに昼となる。以前は湯沸場に火があつて、残飯を温めて昼食としたが、今は朝夕の一回しか火を燃さないので何の用事もない。天気がよければ外に出て日向ボツコ、寒い日はじつと寝た儘〈ままゝ〉。三時〈をゝ〉過ぎると、又

「飯上げ」とかかり、少し身体を動かして床に就いた頃はそろそろ暗くなつて来る。それ以後は長い夜があるばかりで、今の部屋では点呼も何もない。かうして一日が過ぎて行く。かういふ日を何時まで続ける事かしら。

（一、五）

○伝聞。先般の後送患者中、二百七十名船舶にて窒息、水葬に付せられたと。（一、五）　〈真偽は判らないが、輸送中の死亡は多かった由〉

○腹八分目と云ふ。今まで与へられる量も少く、自ら奔走して手に入れる能もないので、自然食事は少い目であつたが、その結果は如何。下痢はした事がない、食欲も維持出来た、然し体重はさつぱり増えない。これからは食欲と腹工合を勘へ、無理でない限り、食へるだけ食ふ事にしてその結果を待たう。（一、五）　〈だいぶ元気づいてきた様子。〉

○一月十五日　体重測定　四〇、五〇〇（〈十〉二、三〇〇㌘）

但シ襦袢、袴下、腹巻、靴下着用ノ上ノ事ナレバ、正味ハ未ダ四十㌘トハナリオヘヲ〉ラヌナリ。

○後送の話が起り、結核病棟〈三〇号室〉より十名選ばれ、その中に自分も入りゐる由。十七日頃と云ふが、又延びたとも云ふ。（一、一五）

○一月十四日付軽快報発せられ、通報解除となる。後送予定に繰入れられたためだらう。近頃、食欲ものすごく盛んで、いくら食つてもひもじく、いささか胃を拡張さしすぎた様である。然し下痢は全然心配なく、腹の方では或程度自信が出来た。二㌘余体重が増えたのも十分食つたため、矢張り食はねばだめである。（一、一七）

○恒産無くして恒心有る者は惟だ士のみ能くすと為す。民の如きは即ち恒産無ければ因つて恒心なし。苟くも恒心なければ放辟邪侈為さざる無きのみ。（孟子）

○隣にゐた梅沢兵長へ後から入室して来た人〻が死亡するや否や、○は早速、図嚢や雑嚢、背嚢の入組品に手をつけ、闇へ暗〻中を煙草火頼りに索へ探〻る。その傍若無人の様に腹が立ち、夜明けて糾してみたが、言葉足らずに苦い後味が残つた。死人がまだ横はつてゐる枕許からその所持品を盗み出す行為、而もそれを何の恐れもなく平気でやりとげる図太さ、所詮我々には出来る事ではない。かかる人間と口をきくさへけがらはしい。けがらはしいと思ひながら、一緒につき合つて行かねばならぬ現況が種々の苦衷を生んで来る。

○が一往かくましたへかきまわした〻残りの中から、の班長が動けない身体を動かして背嚢等を引き寄せ、外套や編上靴をとへ盗〻る様子、とても見られた態ではない。何故人はかくも物に執着するのだらう。特にのの如きはその靴を穿つ日のある様にも見えない病状だからコツケイである。○の背後にはXが在り、○に劣らぬ醜さを露呈してゐる。（一、二一）　へどうせ衛生兵にとられるだけだからというのが○達の理屈。〻

○栄西禅師「興禅護国論」　禅宗は戒を以て先とする由を論ず。

○論語　富と貴とはこれ人の欲する所なり。其の道を以てせずして之を得れば処らざるなり。貧と賤とは人の悪む所なり。其の道を以てして之を得れば去らざる也。――決して富貴を厭はない。ただ「道」が根本――

○今日は雨がばらばら来たかと思ふと霙の様な雪が一寸の間顔を見せた。これが今年の初雪であらう。四、五日前には二日程続いて濃い霧の朝があり、その少し前には霜が降りて大地が少し凍ててゐた様だ。その様な日には

水溜めに薄氷が張つてゐたらしいが、自分はまだ一度も氷を見た事がない。この様な日以外は実に温暖で、寒中の今がこの様なれば、漢口の冬は寒さ知らずである。第一回後送の〈ある〉前、即ち十二月初旬、それに元旦前後に寒いと感じた時もあつたが、今ではその様な日は更にない。日向に永くゐればかへつてあつく、夜も湯タンポを要しない。後送の話は目下立消えてゐるが、来月中旬にでもなれば、今年は殆ど寒さ知らずに過すこととならう。（一、二五）

○食事の分配、二十八号で貰ふ飯や菜について、甚だ憤どほろしく、看護婦を中にして、目下盛んに争論中。時を経ては馬鹿気た事と放擲したくもなるが〈なろうが〉、不公平な扱を受け、不正を目前に見ては黙つてゐる事が出来ず、あくまで闘ふ気になつてしまふ。而もこの不正を見る機会が余りにも多い。（一、二五）

○一月二十六日　体重測定　四二、二〇〇（〈十〉一、七〇〇）

但し、以前の時より病衣、襦袢が加つてゐるので、正味は増えてもゐない。

○二十五日夜、炊事場並に糧秣倉庫炎上。二十六日の朝食は乾麺包〈ママ・かんぱん〉。

○二十七日朝、遂に前田婦長殿に食事分配の件を申告。事、大げさ〈原漢字〉となり、当然の帰結ながら、二十八号の連中と看護婦の怒をかふ。（一、二七）

○二月二日　体重測定　四二、一〇〇（〈一〉〇、一〇〇）　但し、一週間前の時より、病衣、病襦袢の重さが加つてゐないので、むしろ増加してゐると見てよい。それにしても、この頃の給養極めて悪く、食事分配に就いて争つてから特食も上らず、現在の程度では〈体重の〉現状維持が出来れば上々である。

夜来庵かぜだより　―若い日の薄田泣菫―　（八）

薄田寿雄

〈一九四〇（昭和十五）年〉　四　月　二　十　六　日　　午前消印、絵はがき。

本日の研究会出席の筈のところ　南座の楽屋の方に少々用事が出来て午後から夜おそくまで入りびたつてゐたので大変失敬しました。先生にもくれぐれもお詫びしてをいて下さい。明日も大阪迄行かねばならず忙しいことだらけです。そのうち一度来て下さい。人物画のぢよつとましなのが出来さうです。

『水甕』五月号詠草。

梅若万三郎師法会の翁

切火する音幕内に聞こえつつ法会の翁始まらんとす

単調なる鼓の音のはれやかに斎の謡はなほし高まる

千歳の舞たけなはとなるなべに太夫は面をおしいただきぬ

笛の音の澄み極まりて翁舞聖の御代をたたへつつ舞ふ

しづかなる鼓の音に送られて翁帰りの運歩へはこゝび厳へいつゝしき

六　月　十　八　日　　付へおそらく十六日の誤り〉、十七日午前消印。はがき。墨書。朱書。

唯今お端がきありがたう、矢立色々ありがたう存じました、この頃写生やら何やらで忙しく家をあけてゐることが多いのでいづれそのうちにお邪魔を致します　いやな梅雨で弱ります　うたの方はさつぱり御無沙汰です、先

日来　胃腸を害して減入つてゐます、

〈以下、行間に朱書〉貴兄古詩源の簡単な注釈書を持つてゐませんか、またどんなのがよろしいですか、又、おついでの節に知らせて下さい、大塚先生が或は東京の方へ行かれるかも分らぬとのこと、少々しんぱいしてゐます、〈以下、墨書〉久高先生が　一度遊びに来てくれとのことです、

『水甕』七月号詠草。

曇日の昼ふけぬらし重々と遅八重桜白くゆれをり　松殿山荘

藤波のさゆれ静まるひと時や風吹きかはる大きむなしさ

松の葉に風は閑（しづ）けく吹き渡り庭石（いし）あたたまる真昼なりけり

雪散りて陽は定まりぬ逝く春を閑かに紅きつつじ一群（ひとむら）

評。　詠まうとするところをしつかり捕へてゐる。

〈これ以後昭和十六年　月号まで詠草が見えない〉

八　月　十　四　日　　午後消印。手紙。

唯今はおハガキ拝見しました。森田直一兄の留守宅左の通り

京都市東山区山科西の口町　亀尾寿重子方。

先日はお邪魔しました。高田〈益雄〉君にも会へて大変うれしく思ひました。同君は全く禅坊主タイプになつて大悪僧といふ感じです。（これは同君には内緒々々）

拐同封の通り艸衣社へ岡本大無氏の歌会・古典研究会〉の講習会がありますからおひまならば御出席下さるれば幸甚です。もし申し込まれる様でしたら僕の名を書いといて下さい。尚もう一枚は住処御存じなら浅井信子さんか高岡歳子さんにでも送つて上げて下さい。僕は住所を知らないのです。もし貴兄も分らなかつたら友人の方に送つて勧誘して下さいませんか。僕も一日か二日位は出席する予定です。それ以上は仕事の都合で不可能です。ではお忙しいと思ひますが、一人でも御勧誘下さるれば大変うれしく思ひます。不一　森田生　原田学兄

九　月　十　日　午後消印。封筒のみ。墨書。

〈内容はたぶん西の研究会の詠草だけだったのであろう。なおこの封筒は大阪の人から森田君にあてた封筒を裏返したもの。このころは多くの人が紙を愛惜した。この美風も今では失われたものの一つであろう〉

八　月　十　四　日　午前消印。はがき。

〈水甕〉社友諸氏の住処ありがたう存じました。早速お誘ひします。

この頃小生は神経の方思はしくなく毎日うつとしい日を送つてゐます。又御来遊下さい。そんな蹇では研究会へも欠席するかも分りません。もし行かなかつたら先生に事情をよく話して下さい。お頼みします。

〈文中の「お誘ひします」はたぶん艸衣社の古典講習会への勧誘のこと。「研究会へも」が同会をさすのか西の研究会をさすのかよく分らないが、たぶん艸衣社のことであろう〉

九　月　一　十　五　日　付、午後消印。はがき。

先日は御多忙中わざわざ御越し下されその上よい先生を御紹介して頂いて本当にありがたう存じました。おかげ

様にてこの頃は随分よくなつて起きたりねたりしてゐます。村上先生は毎日来て下さつて熱心に治療して下さるので大へんよろこんでゐます。」西の研究会は如何でしたか。沢山来られましたか。又お暇な折がありましたら御来遊下さい。右御礼迄　不一

〈「村上先生」は針灸医。原田の父がかかつていて、効果があったのですすめたのであろう。このあと昭和十六年六月まで、手紙・はがきがないのは、森田君の病状や画業のためであろう〉

『水甕』昭和十六年二月号詠草。

草屋根の家の庭広らなり籾ほして冬陽の中に童がひとり　大原

峡地田は刈られつくして日だまりに藁塚高しくろ土の上

簞にさすこぼれ日の淡々し竹の香りのしめりもちたる

竹藪の落葉の中より拾ひ来し苔むす小石土くさきかも

『水甕』三月号詠草。

病床愛石

みづ鳥の　加茂の川原ゆ　吾が拾ひ　ひろひ集めて　ひめ持たる　この石ころを　昨日今日　病みて臥（こや）れば　枕辺に　ここらならべて　賞でつつぞ　終日をゐる。　うち見れば　青き立石（たちいし）　奇しくも　凝れるその青　師の大人の　万仞碧と　よろし名は　名付け給ひしか　天なるや　宇受売の神が神懸り　岩戸の前に　空笥（うけ）ふせて　踏み動響（とどろこ）し　御膳も　あらはに舞へる　その膳よ

まさしくもあり。　霞立つ　はこやへ原漢字〉の山に　住むと聞く　処子がこしかけへ原漢字〉思はする
白き渭石。　奥山の　深き渓なす　くぼらなる　ゆくくろへ原漢字〉石。　次々と　吾が手（た）握らひ
冷え冷えし　その石肌を　見の飽かに　撫でつつをれば　独り寝の　この病床（やみどこ）も　不楽（さぶ）
しくはあらず

反歌

風なぎて外の面は月のさゆる夜を庭石群（にはいしむら）に結ぶ霜かも

『水甕』四月号詠草。

茶椀売る家は苔むす軒の上にへちま朽ちゐて雪つもりをり
京焼の茶椀もとむと陶房の白き障子に対ひ声かく
陶工の妻が茶椀をならべつつ語る言葉は京訛りかも
手にとれば重みかなへる黒茶椀心すみゆく昼のくだちを
松の葉にはらはらぐ雪を眺めつつこの寂けさをひとり楽しむ

『水甕』六月号詠草。

落葉かく音聞えつつ苔深き背面（とのも）の径はすでにかげへ原漢字・日十仄〉りぬ　苔寺
お茶室の壁の水照りのほのぼのと淡きはすでに暮れ近みかも
丹椿の花苔の上に朽ちてゐて荒れたる庭の青き夕ぐれ

踏脱ぎ〈ママ〉に草履が白く見えてをり庭の木群の夕べ小暗く

夢窓国師坐禅石

正覚の御身ながらに猶かくも行じ給ひしこの石の上に

御形容（かたち）枯稿の国師石の上にまざまざおはす眼閉づれば

六　月　　日　　日付なし。消印も日付のところがきえている。手紙。

拝啓　貴兄も益々御健勝の事と思ひます。私もどうにか無事ですが、毎日草稿と写生でふらふらになつてゐます。

扨、何時か二人で議論（？）した問題で、実は私の言つたことを貴兄が充分飲み込んでゐないらしいので、気になつてゐたのですが　疲れてゐたり　面倒臭かつたりで書かなかつたが、昨日今日　妙に気になつて　仕事中も頭にこびりついてゐるので　疲れてはゐるがちよつと書きます。乱筆多罪

後から言ひ出した「限界」とか「息吹」とかは気持の相違から　二人の意見が対立するのですが　これはそのまま放つて置きます、ただ　大塚先生宅で言つたのは（大体忘れたけれど）　〈中村〉憲吉〈斎藤〉茂吉の作品が〈佐藤〉佐太郎よりずつと完成された　勝れたものであるといふことを単純に言つたので　貴兄が先日のハガキで人麻呂と原田憲雄とくらべてゐたが、つまりその相違を　言つたので意味は甚だ簡単です。〈欄外に〉　一つの作品が或る作品より劣つてゐると言つても、否定することにはなりません。〈以下本文〉その単純なことから羽根が生へて色々と面倒になつてしまつたのです　ただ「縁紙になれば格が小さくなることは仕方がない」とい

ふ大塚先生の御言へ葉〉には全く反対でした。又、同先生の朗々と吟ずる様な調子のものからゴツゴツした調子にならざるを得ないといふのにも反対でした。ただ　これは見解の相違ですから　どうにも仕様がないのです

（先生や兄は歌に命を打込んでゐる人、私は趣味として専門へママ〉外にある人間ですから私の気持に多少とも遊びの様な気持があるかどうか、これは今後反省してみます）私の言つたのは以上の様な単純なことなのでした。佐太郎に対する我々二人の見解の相違は別として、前の貴兄のハガキにも茂吉と佐太郎とを比較した時のことに言及してゐられるから事は一層明白なわけです。ただ最後に言ひたいのは「佐太郎の格が茂吉より小さいと言つて否定するなら万葉一つを拾つて後の歌集を捨てればよい、」といふ君の言葉は　私は全く解せません。古今、新古今の最高峰の作品は格に於ても　しらべに於ても　万葉より劣るとは決して思はない。兄の言葉では古今新古今以後の歌が万葉に比して格が落ちると解釈せざるを得ないけれども、何時もの兄の言葉からしてをかしい。これは両者の比較に急なあまりの言葉だと思ひます。もし真実さう思つてゐられるのなら、格といふ言語の解釈が二人の間で違つてゐることになります。ただ佐太郎を否定（全面的に否定はしないし、少しの作品はよいと思つてゐます。言葉の行きがかりで全部を否定したみたいですがさうではありません、又或る一種の価値を認めてゐることは、大塚先生の御宅で言つた筈）したのは　格の大小にあらずして　私の歌に対する考への限界外にあるためです。

それからもう一つ、憲吉を古典とするのは当然ですが、茂吉を古典とするのはどんなもんでせう。私の嘆賞する高千穂峰などは　製作年代から言つてもごく最近のものですし、歩道へ佐藤佐太郎歌集〉などと同年代のもので

す。この社会に生活してゐて、新しい精神をもつた歌を製作（これは歌に限りません）してゐる以上　古典とは言へないではありませんか、たとへ歌が完成しきつてゐても（芸術に完成し切つたものはない筈ですが仮に言ふならば）やはり古典とは言へないと確信します。ただその作品に旧時代の古臭が残つてゐるのなら別ですが、茂吉には感じません。もし茂吉を古典とするなら　画壇で言へば〈安田〉〈靱彦〉〈小林〉〈古径〉〈菊地〉〈契月〉の先生方も古典と言はざるを得なくなりませう。あの新しい精神は、我々青年の神経よりももつともつと新鮮なものを感じます。私は〈横山〉〈大観〉〈竹内〉〈栖鳳〉先生ですら古典とは思つてゐません。又一つ反対しましたが、自分の思つてゐることを卒直に述べました。

これで大体私の言つた意味が分つて下さつたことと思ひます。佐太郎の問題は又ゆつくり二人で話しませう。

「寒雲」〈斎藤茂吉歌集〉に於ける多くの歌は私の所謂限界外の歌が多いが、その様な歌が土台となつて立派な作品が生れてゐるので、その意味で価値がある。佐太郎氏もあれだけの腕を持つてゐるのだから歩道を土台として本当の立派な作品を生む様祈る次第です。

お互に大いに芸術のために奮ひ起ちませう。見解の相違はあつても最後に行きつく所は同じでせうから。さよなら。〈以下欄外〉私の芸術観は又書きませう。呆言多罪　人物を描くとどうも翼賛会のオヂサンに叱られさうな絵になるので弱ります。私はどうもその様な絵を一人でコツコツ楽しんで描く作家になりさうです。今大作をやつてゐますが、ちつとも興味が出ず疲れるばかりで弱ります。もういい加減にほり出すかも分りません。図は稽です。人物がかき度いのですが出品画にはかかしてもらへません。

漁家傲　―李清照（一七）―

原田憲雄

雪の中でももうわかります春の便りのやってくるのが／寒梅をちりばめて赤い枝しっとり、／匂う頬は半ば開いてなよなよ／庭のあたりで／湯あみしてみがきぬいた玉の人／／造化の神さまのなんとイキなこと／はればれとお月さまに照らさせて／いっしょにどうぞこがねの樽にたたえた緑のお酒／酔うまいなどとおっしゃらず／この花はどんな花にもまけません。

双調。六十二字。前・後段、おのおの五仄韻。句点（。）でくぎったところが韻字。

雪裏已知春信至。　Xuèlǐ yǐzhī chūnxìn zhì,
寒梅點綴瓊枝膩。　Hánméi diǎnzhuì qiǒngzhī nì.
香腮半開嬌旖旎。　Xiāngliǎn bànkāi jiāo ǐnì.
當庭際。　Dāng tíngjì,
玉人浴出新妝洗。　Yùrén yùchū xīnzhuāng xǐ.

瓊は赤い色の玉、西方の仙境コンロン山にその玉の樹が生えているというが、ここは別に関りはなく、飾りことばである。腮はまぶた、またその周辺、ひいては顔をさす。旖旎は旗の風になびくさま、はたはた、ゆらゆらといったことば、オノマトピア。ほかにはむつかしいことばはなく意味にも透りにくいところはないだろう。

北宋、すなわち李清照の時代の流行歌曲に、漁家傲の調で作った「十二月鼓子詞」というのがあったらしい。

そういえば、この前段には、李賀の「河南府試十二月楽辞・正月」を本歌とした趣きがあり、初句には賀の「楼に上り春をのぞめば新しき春は帰り来」上楼迎春新春帰が、二句には「ほのぼのと柳黄ばみて水時計みづ漏る遅し」暗黄著柳宮漏遅ないし「寒き緑かそけき風に短かかる糸萌えそめぬ」寒緑幽風生短糸が、三句には「露の瞼めさめぬままに朝やみに匂ひそめしか」露瞼未開対朝暝が、そして五句には「錦の牀に暁をなほ臥す玉の肌冷えて」錦牀暁臥玉肌冷がほのめくではないか。わたしが李賀に親しみすぎたためについその田に水を引くことになるのではないかと省みるのだが、どうもそうではなく、詞人はみな李賀が好きだったらしい。かれの詩集の最も古い板本が二つも出て今に遺るところからも宋人の昌谷愛好は裏付けられる。さて後段。

造化可能偏有意。　Zàohuà kěnéng piān yǒuyì.

故教明月玲瓏地。　Gùjiāo míngyuè línglóngdì.

共賞金尊沈緑蟻。　Gòngshǎng jīnzūn chén lǜyǐ.

莫辭醉。　Mòcí zuì,

此花不與羣花比。　Cǐhuā bùyǔ qúnhuā bì.

可能は俗語、かもしれない、というほどの今の中国語に近い意。有意は、意思あり、でその意思はわたしの訳語が示すほどのふくらみをもつことば。故教は、わざとそうさせる。玲瓏は美しいさまをあらわすオノマトピア、地はいまの的と同じ接尾辞。金尊は黄金の樽、金は飾りことば。緑蟻は美酒の名、表面に緑のあわがわきたちアリのように見えるところからいう。緑蟻の上の「沈」字はめずらしい使い方だが、これまた李賀「残糸曲」の、

「縹粉壺中沈琥珀」に学んだのであろう。そうしてこの沈は、陶淵明の「停雲」の詩の序にみえる「湛」とほぼ同じ意に違いない。

建康（いまの南京）に住んでいたころ清照は、大雪が降るといつも、みの笠をかぶり、まちなかを遠くまで見て歩き、詩ができると夫に唱和を求め、夫の方はいつも苦労した。そんな話を彼女より少しおくれる宋人が伝える。建康に住んだのは四十四歳。若ければなおさらだったろう。この作も雪を見て歩いて、帰ってまず作り浮きうきと夫に唱和を求めた作らしく感ぜられる。苦りきって「今夜はおれは飲まないよ」という夫の顔を想像するとおかしくなる。のちにもしばしば梅花をうたうのは梅を愛する情からだけではなかっただろう。（一一、三〇）

前段の「洗」後段の「蟻」は上声で、他の韻字の去声であるのと異るが、詞では通用が許される。また後段の「莫」は入声の仄字だが、定格なら平字でなければならぬ。通用とはいえ上声で韻をふんだバランスをここで果したのだろうか。（一九八四年十一月三十日）

見るものと見られるもの　ーランカーの岸辺で　（三）ー

原田憲雄

「見るものもなく見られるものもない」という楞伽経について考えはじめるわたしが、足をふみ出したところで四巻本がどうの十巻本がどうのと言っているのは、われながら歯がゆく、お読みくださる方はなおさらであろう。漢訳に三本あっても李賀の時代までにはみな訳されていた。三本ともに読んだとすれば問題はない。わたし

も最初はそう思って、漫然と唐訳から読みはじめた。かなり読み進んだがしっくりしない。はなはだ主観的なことばで恐縮だが、長い間李賀を読んできてわたしの内部に形成された「李賀世界」といま読む七巻本の唐訳からつくられつつある「楞伽世界」との間にすきま風が吹きこむ感じがするのである。これも虚妄に違いない。しかし、虚妄につきあたった人間は、その虚妄は何か、なぜその虚妄が生じるのか、と問うほかに進みようがない。わたしは四巻本宋訳を読み合わせることにした。当時もっとも普及し、いまも楞伽といえばこれをさすほどに代表的な本だからである。これもまたぴったり来ない。十巻本魏訳を読み合わす。これこそ李賀の読んだもの、と信ぜられた。のちに、かれの四代前の祖の李孝逸が三論にくわしい道亮禅師に帰依したこと、三論宗では十巻本魏訳を重用したことを知って、わたしの予想が確かめられたと思った。

ところで、李賀は、楞伽をいかに読み、何を学んだのか。かれの詩で直接楞伽にふれるのは、案前にうずだかい、というだけである。唐の詩人は一般に仏典を深く読んでも、おのれの信解をごたごた詩中に持ちこむことはせぬ。詩に薫染した微香をたよりに、みずから仏典にわけいり、かれのたどった迷路をたどりなおす以外にそれを知る道はない。暗きより暗き路にぞ入りぬべき、と嘆きたくなるが、蘇東坡さえ句読をきりなずんだ楞伽をのつこつ読む。道草が長くなりすぎた。本題に返えろう。四巻本は梵本の小本をさらに省略したものとする法蔵の説明に対する学者の疑い、についてであった。

現在の通説といってよいその説をかいつまめば次のようなことになろう。

1　四巻本宋訳は他の諸本より原初的な梵本を訳したもので、楞伽経の本質はここにある。ただこの中でも肉食

禁止にかかわる部分は新しく加えられた層であろう。

2　他本にあって宋訳にない部分、すなわち魏訳（唐訳）でいえば、請仏品（羅婆那王勧請品）の勧請の部分と陀羅尼品（陀羅尼品）総品（偈頌品）の全部は後代の付加で、その成立は四四三ー五一三年、宋訳から魏訳までの間であろう。宋訳の本質的なものと、付加部分とは機械的に結びつけられたあとが歴然としていて内的関連性はうすく、付加部分がなくても楞伽の理解にはさほどのさしつかえはない。

3　楞伽経全体は、大乗教義綱要の無組織な集積であり、本質的な宋訳においてもその点ではかわりがない。

4　付加された部分のうち請仏品（羅婆那王勧請品）はインドの民族的叙事詩「ラーマーヤナ」が成立してから、それをとって加えたもの。

5　陀羅尼品（〃）は仏教教団に密教が興起するにつれて加わったもの。

6　総品（偈頌品）は本質的な部分にある偈頌に他の経論から引いたり新たに作った偈頌をかきあつめたもの。全体の統一性に乏しいが、すでに失われた経論の断片が含まれているので大乗仏教思想研究にとっての貴重な資料である。

以上である。さっとしたあげかただが、わたしの考えをのべてゆくにはこれでよく、必要なことはおいおい補足する。学者の説そのもの興味をもたれる方は、Daisetz T. Suzuki ; Studies in the Lankavatara Sutra などを見ていただけばよい。

ここで後代の付加とされる部分でも、五一三年までに成立したことは間違いない。だから、いわゆる本質的な

部分から切りはなしても、それだけを真正面から取りくむ研究があってもよさそうだのに、それがほとんどない。学問研究にもはやりすたりがあって、はやらぬところへは人が寄りつかないのだろうか。楞伽経の研究も、ちかごろはずいぶん多くなったが、いずれもいわゆる本質的な部分についてのものばかりで、請仏品については、管見ながら、わたしの「世尊と夜叉王」以外にはなく、「陀羅尼品」については全くない。ダラニを読む力がないのでここでは「陀羅尼品」に言及することは慎しもう。「請仏品」については前稿で、これが楞伽経の本質部分で、他はその注釈的部分だ、といった。前稿は、それを書くとき梵本が読めなかったので、いろいろの誤りがあったが、この点では考えはかわらない。

「請仏品」では、マラヤ山のランカー城に住む夜叉王のラーヴァナが、世尊をランカーに迎え、種々の質問をし世尊がこれに答えるという筋が展開する。この夜叉王が「ラーマーヤナ」から来ていることは疑う余地はない。それでまず「ラーマーヤナ」のあらすじを述べておく。岩本裕訳『ラーマーヤナ』を参考にした。

ガンジス河の北コーサラ国の都アヨーディヤーにダシャラタ王がいた。子がないので「馬の祭」をして祈った。そのころ天界の神々は鬼神ラーヴァナに悩まされ、ヴィシュヌ神に「人間に生れかわってラーヴァナを殺してほしい」と願った。ヴィシュヌ神は承諾しダシャラタの王子に生れる決心をする。祭が終るとダシャラタの三人の妃が四人の子を生んだ。カウサリヤーは、長男でヴィシュヌ神の権化であるラーマを、ガイケーイはバラタを、スミトラーはラクシュマナとシャトルグナを。

成人したラーマとラクシュマナは仙人のすすめで悪魔退治の旅に出、ヴィデーハのジャナカ王宮で、ラーマは王

女のシーターと結婚する。彼女は普通の人ではなく王が耕しているとき大地から出て来たのである。

ダシャラタ王はおのれの老いを知り、ラーマに王位をつがせようと思い即位式の準備をすすめる。王はかつてカイケーイ妃に望みをかなえると約束し、妃が保留していたことがある。彼女はそれをたてにとって自分の生んだバラタを王位継承者とし、ラーマを十四年間追放するよう求めた。ラーマは進んで追放に服し、シーターと森に入る。まもなく王はラーマを失った悲しみの中に死に、旅中のバラタがよびもどされ王位につくよう母から命ぜられる。バラタは兄を愛していたのでラーマが王位につくべきだといって、兄をさがしにゆく。バラタに会って父の死を聞き、王位につくようもとめられるが、ラーマは父命を守ることがおのれの任務といって帰国しない。バラタはやむなく兄の靴をもらって帰り王座に安置する。

ラーマの住む森の行者たちが、修行の邪魔をする悪魔から守ってほしいとたのむ。たまたまランカーの魔王ラーヴァナの妹シュールパナカーがラーマを見染め結婚の申込みをするが、ラーマは弟のラクシュマナに命じて彼女の耳と鼻をそがせる。彼女は兄のカラに訴えカラは大軍を送るが全滅し、カラもラーマに殺される。シュールパナカーは海を渡ってランカーにゆき兄のラーヴァナにあだうちをたのみ、またシーターの美しいことを説いて奪うようすすめる。ラーヴァナは空中を飛びラーマの森にゆき、シーターを奪ってランカーに帰り妻になるよう強請するがシーターは従わない。十二カ月たっても従わなければ食ってしまうとおどし幽閉する。

シーターを失ったラーマは、サルの王のハヌマンの助けで彼女がランカーにいることを知り、大軍をひきいてランカーに向かう。ランカーではラーヴァナの弟のヴィビーシャナがシーターを返すようすすめる。ラーヴァナが怒

り、叱責された弟は兄を捨て、ラーマの軍に加わる。かくてラーマ軍はランカーに渡り、はげしい戦いののちラーヴァナを殺し、ヴィビーシャナをランカー王とする。

シーターはラーマとの再会を喜ぶが、ラーマが貞操に疑いをもつことを知り火中に身を投げる。火の神アグニがシーターをだきあげ潔白を証明する。かくてラーマの一行はアヨーディヤーに帰り、ラーマは王位につく。だが国民の間にはシーターの貞操に対する疑いが消えず、民衆の非難にたえないラーマは弟のラクシュマナに命じてシーターを森に捨てさせる。シーターは森の女仙たちの間でしばらく暮していたが、やがて地神のふところにいだかれて消える。

はなはだ簡単ながらあらすじをこれで終る。「ラーマーヤナ」は実在の詩仙ヴァールミーキーの作とされるが、純然たる創作ではなく、それまでにあったさまざまの伝承を作品化したもので、現在の形のものには、かれ以後の人の手になるものが増加されている。その上、インドの古典の例にもれず、作者ヴァールミーキーその人の生存年代も明らかではない。しかし岩本氏によれば、後代の付加と見られる第一、第七の両篇を除いたものの成立は、二世紀あるいは三世紀であろう、ということで、四世紀以後には下らぬらしい。現に、四巻本涼訳の訳者とされるダルマラクシャが訳したというアシュバゴーシャの仏伝文学「仏所行讃」の分舎利品第二十八に「羅摩（ラーマ）は仙人の子なりしも、千臂王をうらみ、国を破り人民を殺しぬ、……羅摩は私陀（シーター）のために、諸鬼国を殺害せり」とうたう。訳者はダルマラクシャではなく宝雲だとする説が有力だが、そうだとしても宝雲は四巻本宋訳に関与した人であり、アシュバゴーシャは一世紀の人とされる。引いた部分がかりに後代の付加としても、四巻本宋

訳までには「ラーマーヤナ」が広く愛読されたことが知られる。また、宝雲の訳した「仏本行経」の八王分舎利品第三十一に「むかし華上子、号して十頭神といい、堅固に色欲に著し、よって身命を喪没せり」とうたい、華上子がラーヴァナであること、先人に説がある。「仏所行讃」の「千臂王」もラーヴァナをさすのであろう。それなら、四巻本宋訳が依った梵本にラーヴァナに関する部分がなかったと断定することはできない。宋訳が底本とした梵本になかったとしても、それの存する梵本の異本がなかったとは、さらに断定できない。中国に伝わった梵本は当時インドにあった梵本のごく一部であり、伝わったものも一部分しか訳されず、梵本はほとんど失われ、訳されたものさえ多くが失われたことを知るわれわれには、かろがろしく断定することはできないのである。鈴木大拙氏の筆は慎重だが、楞伽を論ずる学者の説の中には驚くべき武断もまじる。見るものの分別が見られるものをさまざまに描く。見られるものも見るものも幻に似たものではあろうが、これはうつつか幻かと、その幻の中にさ迷い入ったわたしは、ラーヴァナとともに問いただしてゆこう。（一九八四年十二月二日）

高田　淳『辛亥革命と章炳麟の斉物哲学』

十一月二十四日、著者恵投。四〇〇頁の一四八頁まで卒読した。批評や紹介はわたしの任ではない。章氏は中国近代の特異な思想家である。中国はもとより、西洋・インドの諸思想まで検討し、それを知識の商人としてではなく、近代の中国に生き、中国の前途をおのれの責任とする人として思索した結晶が『斉物論釈』。これを中心にその生成過程を、著者はまた、おのれの問題としてねばりづよく追尋する。研文出版発行。（憲雄）